BADMINTON AICHI

バドミントン愛知

No. 170

令和8年2月　発行者／愛知県バドミントン協会　編集者／広報委員会

S/Jリーグ 2025 一宮大会

11/29(土)、30(日)いちい信金アリーナで、S/J BADMINTON LEAGUE 2025一宮大会が開催された。

本年度のS/Jリーグが開幕して3会場目になるが、開幕戦の東京大会2日間は女子12チームのみ、2会場目の秋田大会は男子4チームがそれぞれ1対戦のみで、男子12チームが揃う本大会は、男子開幕戦の位置付けであろう。

当会場は来年度のアジア大会の開催地になっており、コートマット周りが赤色に装飾され、壁面に暗幕がたらされるなど本番さながらの雰囲気となった。

観客動員は11/29(土)2,186名、11/30(日)1,826名で、地元4チームと岐阜1チームの応援で東京大会を上回る来場者となった。

初日の第1試合は、前年度優勝のトナミ運輸が地元大同特殊鋼に3−0で貫録勝ち。ジェイテクトStingersはコンサドーレに第2ダブルスがファイナルゲームまでもつれたものの3−0で勝利。豊田通商はシングルスがファイナルゲームに、第2ダブルスも競ったゲーム展開になったが3−0で好発進した。

第2試合は、昨年度のTOP4が3チーム登場。NTT東日本が三菱自動車京都に危なげなく3−0で勝利。桃田賢斗選手がシングルスで出場し、POM(Player Of the Match)を獲得した。日立情報通信エンジニアリングも地元東海興業に3−0で勝利。BIPROGYも丸杉スティーラーズを完封し、先の秋田大会と合わせ2勝0敗となった。

2日目の第1試合は、トナミ運輸がコンサドーレを3−0で下し2勝目。保木・小林ペアが躍動した。地元ジェイテクトStingersは三菱自動車京都に圧勝で2勝0敗。TOP4出場に向けて順調な滑り出しとなった。豊田通商は東海興業との地元対決で、第1ダブルスが激戦となったがファイナルゲームを制して2勝0敗。東海興業は痛い3敗目を喫した。

第2試合は、NTT東日本が3−0で制した。シングルスに奈良岡功大選手が出場し、POMに選ばれた。日立情報通信エンジニアリングも丸杉スティーラーズに完勝して2勝目。BIPROGYも順当に勝利した。

今大会は非常に稀有な男子12チーム総結集となり、男子のスピードとパワーを存分に堪能することができた。地元勢の雄姿を間近で見られ、ファンとの交流機会も多かったようだ。ハーフタイムには一宮市のチアリーディングチーム「KIRALISH」による素晴らしいパフォーマンスも楽しかった。

なお、初の取り組みとしてプレミアム席の特典「出場チームとの集合写真」「サイン入りポスター」を準備した。運営上で様々な問題は起こったがおおむね好評という印象だ。

オペレーションを含め、選手・チームの負担にならないような特典提供を検討したい。

また、今後は女子チームも招聘し、華やかさと美しさも加えて観戦できると、なお一層、バドミントンファンの満足を得られる大会になるであろう。

（広報委員長　松浦孝至）

第147回令和7年度秋季愛知県新人バドミントン大会

令和7年8月24日、30日と9月6日にいちい信金アリーナ他で開催された。

●女子シングルス

松本 紗奈	21 － 17	宮嶋 峯羚
（はりーあっぷジュニア）	21 － 7	（守山北中）

決勝は、松本選手と宮嶋選手の中学生対決となった。

序盤は、松本選手が高いクリアを駆使しながら、宮嶋選手を前後に動かす。宮嶋選手もつなぎながら、要所で攻撃をしかけ反撃する。松本選手がショートレシーブや攻撃ショットでミスをして競り合いとなる。松本選手は「1ゲーム目は勝つことを意識して、緊張した」が要所では堅い守備力を発揮しリードは許さないまま、1ゲーム目を取る。

2ゲーム目に入り、積極的に宮嶋選手もしかけるが、松本選手は厳しい返球を繰り出して主導権を渡さない。そのままゲームの終盤はスピードを上げて速いタッチでラリーを決め、一気に優勝を決める。「北海道でのJOC」と次の目標となる大会に思いを向けていた。

●男子シングルス

田中 颯真	21 － 9	中島 侑飛
（愛産大三河高校）	11 － ×	（星城高校）

準決勝は、田中颯真選手が、加藤環選手（旭中）と対戦し、安定したプレーでラリーをつなぎ決勝に勝ち上がる。もう一方の中島侑飛選手と岩崎大知選手（愛産大三河高校）の高校生対決は3ゲームも延長にもつれ込む大接戦となる。攻守が切り替わるラリーが最後まで続いた熱戦は中島選手が勝利した。

決勝は、堅実なラリーを続け持ち味を発揮する田中選手に対して、体調がすぐれないなかで試合を重ねた中島選手の動きは精彩を欠いており、第2ゲーム途中で、中島選手が棄権をし、田中選手の優勝が決まる。

「攻撃力をカバーするため、ミスなくつなげながら試合を進めた」と言うように、安定した展開が田中選手に優勝をもたらした。高校の試合において「県の団体3位に入り、東海大会に進みたい」と、目標を語っていた。

（広報委員　中村圭吾）

●男子ダブルス

石原 魁人・藤本 琢矢	21 － 15	島田 航・伊地知 優太
（RS NONAKA）	21 － 17	（SMAGAN・スペースシャトル）

中学生、高校生、社会人と幅広く60組以上の参加があったが、序盤から年齢に関係なく質の高いラリーが多く展開された。決勝は共に準決勝までの5試合をすべてストレートで勝ち上がった藤本・石原組と島田・伊地知組の社会人対決となった。1ゲーム目からスピード感あふれるラリーを繰り返し、ミスがあっても互いにフォローし合い、要所を強いスマッシュで押さえていった藤本・石原組がじわじわと差を広げ、ストレートで優勝を勝ち取った。石原は「岐阜から愛知に来て優勝という結果を出せた」と喜び、藤本は「県社会人大会にも意欲的に取り組む」と、お互いペアに支えてもらった感謝の気持ちに溢れていた。

●女子ダブルス

桑原 心・齋藤 比佳莉	21 － 9	牧田 みなみ・市川 葵
（星城高校）	21 － 10	（はりーあっぷジュニア）

決勝は、立て続けに高校生を倒して勝ち上がってきた中1の牧田・市川組（はりーあっぷジュニア）とシード枠の社会人、有力な中学生を制した桑原・齋藤組の対戦となった。共にノーシードからの決勝進出だ。序盤はお互いに様子見のラリーを続ける中で、中学生ペアがコースをしっかりついて高校生ペアのミスを誘い競った展開となった。しかし、1ゲーム目後半からパワーに勝る桑原・齋藤組がラリースピードを上げ、甘くなった返球をしっかり強打で決めて差を広げそのままストレートで勝負を決めた。中学生時代からともに練習をしてきたがダブルスを組み始めたのは最近のふたり。早々に結果を出すことができ、「この勢いを高校の新人戦に繋げたい」と語った。

（広報委員　大村悠介）

第34回全国小学生バドミントン選手権大会

●都道府県対抗団体戦　女子全国制覇　男子3位入賞

12月19日から21日に広島県立総合体育館（広島グリーンアリーナ）にて開催されました。

男子チームは、なんと3位。個人戦6年男子シングルス3位入賞のエース長神旺征（豊橋ジュニア）を中心にダブルスの伊藤稜平（師勝ジュニア）三宅創馬（ウィスタリア）、セカンドシングルスの村井晴飛（西尾ジュニア）、スーパーサブの松下幸太郎（はりーあっぷジュニア）。それぞれが自分の役割を果たし、それぞれを補う、まさにチーム力で勝ち取った見事な3位です。

女子チームは、全員個人戦出場者、昨年の全小個人戦で5位入賞以上の実績のある選手ばかりで構成されていて優勝候補の筆頭。本命のプレッシャーに押しつぶされることなく栄冠に輝きました。

ヤマ場は準決勝の香川戦。ダブルスの平田花子・田中倫奈（winwin）が0−2で敗退、続く第1シングルスの渡邊世怜菜（大里東ジュニア）が1ゲーム目を奪われ追い込まれます。何とか2ゲーム目を奪い返して1−1。並行して隣のコートで行われている第2シングルスの宮下蒼夏（SGUジュニア）も1−1でファイナルゲームへ。ベンチの長尾柚希（フォルトゥーナ）、高日愛佳（長久手ジュニア）からの必死の応援を受け、2人共ファイナルゲームを勝ち切って決勝に進出しました。勢いそのまま、優勝です。

年間十数回の合宿、9月から12月にかけて、静岡、栃木、和歌山、兵庫、岐阜へ5回の団体遠征。合宿で体力、筋力、技術力を高め、遠征で試す。課題を持ち帰り合宿で改善。その中で楽しい事、つらい事を共有し、団結力を深めて、とても良いチームになりました。

愛知県の小学生はとても強いです。小学生連盟、所属団体、各団体の監督・コーチ、そして選手が一枚岩になってお互い協力関係を築けていることが一番の要因だとつくづく思います。

（小学生連盟強化委員長　小林宏也）

●個人戦　渡邊世里奈選手（大里東ジュニア）　全国優勝

2025年12月19日～ 23日に行われた、個人戦6年女子シングルスで優勝しました。

小学1年生の頃に「決勝で戦おう」と約束した藤城百蘭選手（ワイズワン東京）と、今回ついに念願かなって決勝で対戦し、勝利することができました。

愛知県の代表選手として県外遠征を重ね、敗戦から弱点を分析し、課題のミスの多さやフィジカルの弱さを克服するためにチーム練習や個人練習で修正を繰り返してきました。練習での改善点を実践で試しながら更に挑戦と修正を積み重ね試合に臨みました。

大会序盤は苦戦しましたが、重点的に取り組んだラリー力強化の練習が功を奏し、徐々に調子を上げていき、全試合ストレート勝ちで優勝を飾ることができました。

これも長束監督のご指導、チームメイトや保護者、県強化練習会や遠征支援など、多くの方々のご尽力によるものと心より感謝申し上げます。

（大里東ジュニア　コーチ　渡邊真・渡邊仁美）

特集 明日へ駆ける

令和7年度東海総合バドミントン選手権大会

令和7年9月20日と21日に2日間にわたりメディアス体育館おおぶで開催されました。大会の模様は県協会のYouTubeチャンネルでライブ配信し、後日メディアスエリアニュースでも放送されました。

●男子シングルス

決勝は池端元哉選手（豊田通商）と激戦を制して勝ち進んできた同じ所属チームの戸内佑亮選手との対戦となった。戸内選手の棄権により池端選手の優勝となったが両者とも全日本総合出場の権利を勝ち取った。池端選手は「2カ月前の全日本社会人でベスト4に入り、挑戦を受ける立場になった。この大会ではどうやって勝ち切るかを考えてプレーした。全日本総合は気持ちを切り替えて全力でプレーしてきます。」今後の活躍に期待したい。

池端元哉選手

戸内佑亮選手

＜番外編＞激戦の準決勝を振り返ってみよう！

戸内 佑亮 **（豊田通商）**	**14 － 21** **23 － 21** **21 － 10**	**村本 竜馬** （ジェイテクトStingers）

全日本総合の出場切符を賭けた見ごたえのある準決勝となった。

1ゲーム目は堅実なプレーで村本選手が取り、2ゲーム目も有利に進めるかに見えたが、序盤6−5とリードしていたが無理な体勢でシャトルを打った時に足を痛めるアクシデントが起きた。負傷した足を気にしながらも気迫のプレーで中盤をリードするが戸内選手も追い上げ、ついに18−18の同点となった。一進一退の攻防が続き2ゲーム目は戸内選手が逆転で取り返した。ファイナルゲームはケガのため動きに精細を欠く村本選手を終始リードした戸内選手が取り返し全日本の切符を手繰り寄せた。

（広報副委員長　鈴木勝男）

●男子ダブルス

優勝は家壽多慶太・農口拓弥ペア。「4試合しっかり勝ち抜けて嬉しい」笑顔で優勝の喜びを語る家壽多選手。「優勝を狙っていました」力強い声で、答える農口選手。

準決勝では第2ゲームを落とし、気持ち的に焦る場面もあったといいます。しかし、ファイナルゲームを冷静にリードし続け、最後まで守り抜いたことが勝因でした。

優勝の背景には、チーム全体で高め合う練習環境の充実もありました。「川野君との練習を通じて全員の実力を高めています。その結果、川野君も今回3位に入賞できました」仲間同士で切磋琢磨する中から、強さが磨かれていることが伝わってきます。

農口拓弥・家壽多慶太ペア

応援してくれるファンへは、「やる時はやるので応援してくださると嬉しいです」謙虚で率直な言葉の中に、競技への自信と誇りがにじみます。

今後の目標は、「これから始まるS/Jリーグに向けて準備していきたいです」「ダブルスでの総合も結果を狙っていきたいですね」全国の強豪が集う舞台を見据え、すでに視線は次のステップへ。今回の勝利は通過点に過ぎません。彼らの挑戦はこれからが本番です。次なる舞台・S/Jリーグ・全日本総合でどんな活躍を見せてくれるのか、期待せずにはいられません。愛知から全国へ羽ばたくその瞬間を、私たちも全力で応援していきます。

（広報委員　竹内裕嗣）

●女子ダブルス

準優勝の植村理央・去来川琴葉ペア（豊田通商）

初戦は難なく勝ち進んだ。第2試合、1ゲーム目は余裕で制したものの2ゲーム目には相手にリードを許す場面もあり、26-24と接戦の末準決勝に勝ち進む。準決勝でもファイナルゲームまでもつれ込み、決勝は川添・小西ペア（岐阜Bluvic）と対決。1ゲーム目途中から相手にリードを許すとそのまま取り返すことが出来ず、2ゲーム目は相手の得意とするジャンピングスマッシュなど力強い攻撃に翻弄され、本来の試合が出来ず敗退した。

課題も残ったが、粘り強く決勝まで勝ち上がってきた二人には今後の活躍に期待したい。　　（広報委員　鈴木由紀江）

植村理央・去来川琴葉ペア

●東海総合ジュニア

令和7年度東海総合バドミントン選手権大会と同時開催のジュニア戦、男子シングルス決勝は、渡邊楓雅選手（名経大市邨高）が因藤将夢選手とのチームメイト対戦を制した。「普段通りやればいいと思っていたが、相手の調子がよく凄いショットを決められて厳しいゲームになりました。勝ててよかった。他県の選手との試合もよい経験になりました。」

女子ダブルス決勝は、馬場こころ・縣明日香ペア（岡崎城西）がファイナルゲームの末、宮崎結舞・山本樹実ペア（名経大市邨）に勝ち、優勝しました。

男子ダブルスと女子シングルスは健闘及ばず、岐阜県勢に優勝をさらわれました。　　（広報副委員長　鈴木勝男）

渡邊楓雅選手

馬場こころ・縣明日香ペア

理事長通信

愛知県バドミントン協会
理事長　井上　龍

今年度の重点事業で掲げた国民スポーツ大会と第1種大会（全国大会）でメダル獲得増を目指すことと、S/Jリーグ一宮大会開催について報告いたします。

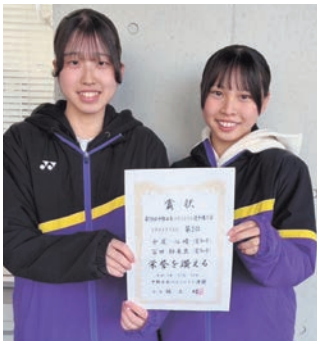
まず、9月28日～ 10月1日に開催された国スポ滋賀大会ですが、成年男子、少年男子、少年女子の3種目参加し、少年男子は1回戦で大阪府に敗退しましたが、成年男子は1回戦、2回戦を勝ち上がり、準々決勝で岐阜県に惜敗しベスト8、少年女子も準々決勝で優勝した青森県に敗退しベスト8という結果でした。惜しくもメダルには届かなったものの、5位以上のチームに与えられる国スポ競技得点を2種目で獲得し愛知県の総合成績に貢献しました。

次に12月23日～ 27日に開催された第35回全国小学生大会において、愛知県は団体戦、個人戦で優秀な成績を収めました。メダルは団体戦2個、個人戦5個を獲得し、特筆すべきは、女子団体優勝、女子個人6年シングルス優勝（渡邊世怜菜さん）です。小学生連盟の強化練習および強化合宿の成果が結実し、指導者の皆さんの努力も讃えたいと思います。

そして、S/Jリーグ一宮大会ですが、アジア大会のリハーサル大会として11月29日、30日に一宮市総合体育館で開催、男子12チームがすべて集結し2日間で2試合ずつ戦うという異例の開催方式で実施しました。観客は2日間合わせて4,000人を超え、男子の迫力あるプレーを楽しんでもらいました。一宮大会の振り返りをして今年秋に開催されるアジア大会の準備に生かしていきたいと思っています。

愛知のホープ

中尾 心晴（なかお こはる） 冨田 紗来良（とみた さくら）（愛知工業大学名電高等学校2年）



中尾心晴選手　冨田紗来良選手

インターハイでの活躍を大きな目標に掲げ、日々の練習に取り組んでいるペアです。互いを深く信頼し、同じ目標に向かって歩んできたふたりは、練習や試合を重ねる中で確かな結びつきを築いてきました。コートに立つ姿からは、目標に向けて積み上げてきた時間と覚悟が感じられます。

持ち前の積極性で試合の流れを引き寄せ、冷静な判断と安定した対応で互いを支えています。それぞれが自分の役割を理解し、互いの強みを生かそうとする姿勢が、プレーの随所に表れています。ミスが続く場面でも声を掛け合い、前向きに立て直そうとする姿は、入学時に比べ、精神面での大きな成長を感じさせます。

昨夏には全日本ジュニア愛知県予選会で優勝し、9月の全日本ジュニアバドミントン選手権大会（北海道）へ出場、11月の中部日本選手権（新潟）では準優勝と着実に結果を積み重ねています。

これらの経験を通して、ふたりは課題と正面から向き合い、改善を重ねてきました。一つの結果に一喜一憂するのではなく、次につなげようと努力を続ける姿勢が、着実な成長へと結びついています。

インターハイという大きな舞台で力を発揮するためには、これまで以上の集中力と粘り強さが求められます。一球ずつにこだわりを持ち、プレッシャーのかかる場面で自信を持ってプレーできるように練習を積み重ねていきます。応援よろしくお願いします。　（愛知工業大学名電高等学校バドミントン部顧問　立松彰吾）

フットワーク

この欄は、連載のコーナーとして県内各チームの紹介やその他の記事を皆さんに続けてお届けしています。

今回は **愛知淑徳大学バドミントン部** を紹介します。

現在約30名。週4～5日、一日あたり4～6時間の練習です。準備からメニュー作成までを自ら考え、主体的に活動しています。一人ひとりがチームの一員として責任を持ち、課題や目的を共有しながら練習を組み立てることは、技術面だけでなく思考力や行動力の向上にもつながっています。

練習は基礎を重視しつつ、個々のレベルや課題に応じた内容を取り入れます。部員同士が声を掛け合い切磋琢磨する環境は、チームとしての一体感を高め、困難な場面においても仲間と協力しながら最後まで諦めずに挑戦し続ける力をも養っています。

また、学業との両立を図りながら限られた時間を有効に活用し、集中した練習を積み重ねることで、競技力の向上はもちろん、バドミントンを通して培った仲間との絆や達成感が、部員一人ひとりにとって大学生活の大きな財産となっています。

今後も部員全員で力を合わせ、目標に向かって挑戦を続けていくとともに、活動を通じて大学や地域に貢献できるチームを目指します。ぜひ温かいご支援とご声援をお願いします。（愛知淑徳大学　門村美璃唯）

勝つための本物
GOSEN®
www.gosen.jp
株式会社ゴーセン　大阪本社／TEL.06-7175-7116　FAX.06-6201-0741

スポーツごころを世界に。
YONEX®

連盟NEWS

学生バドミントン連盟

令和7年11月15日から12月7日にかけて、第70回愛知学生新人バドミントン選手権大会が開催された。愛知学生連盟主管の大会としては初となる混合ダブルスも行われた。

●混合ダブルス

鈴川 拓実・二反田 奈花 （中京大学）	21 － 16 15 － 21 21 － 16	田中 悠翔・山脇 杏梨 （日本福祉大学・愛知淑徳大学）

初開催によりシード権のない混合ダブルス、40ペアが出場し白熱した試合が繰り広げられた。決勝には中京大学の鈴川・二反田ペアと、日本福祉大学・愛知淑徳大学の田中・山脇ペアが進出した。試合はフルセットにまでもつれ込み、ファイナルゲームでは15−15と一進一退の大接戦が展開された。最後は鈴川・二反田ペアが連続得点を奪い、見事優勝を果たした。

（左）鈴川拓実選手　（右）二反田奈花選手

●男子シングルス

小林 泰知 （愛知淑徳大学）	21 － 18 21 － 14	伊藤 丈翔 （愛知淑徳大学）

決勝には、ともに愛知淑徳大学に在籍する小林泰知選手、伊藤丈翔が進出した。

1ゲームは互いに一歩も譲らぬ接戦が繰り広げられたが小林選手が僅差で奪取。続く2ゲームでは一転して小林選手が常に一歩リードする展開となり、そのまま栄冠を手にした。試合後には互いの健闘をたたえ合う姿が見られた。

小林泰知選手

●女子シングルス

高木 星邑 （中部大学）	21 － 18 21 － 14	中西 彩葉 （至学館大学）

決勝には高木星邑選手（中部大学）、中西彩葉選手（至学館大学）が進出した。第1ゲームは序盤、中西選手が主導権を握る展開となったが、高木選手が徐々に追い上げ、逆転で先取。第2ゲームも中盤までは接戦が続いたものの、高木選手が連続ポイントを奪い、そのまま勝利を収めた。

高木星邑選手

●男子ダブルス

浅野 丈徳・三宅 爽太郎 （愛知淑徳大学）	21 － 18 21 － 14	近藤 碧衣・柳 侑吾 （中部大学）

愛知淑徳大学の浅野・三宅ペア、中部大学の近藤・柳ペアが決勝に駒を進めた。第1ゲームでは一進一退の接戦となったが、浅野・三宅ペアがこれを先取。続く第2ゲームでは息の合ったプレーで序盤から主導権を握り、そのまま優勝を勝ち取った。

（左）三宅爽太郎選手　（右）浅野丈徳選手

●女子ダブルス

渡邊 俐月・早野 滴 （南山大学）	21 － 19 18 － 21 21 － 11	山本 優樹・葭田 こころ （中部大学）

決勝は、南山大学の渡邊・早野ペア、中部大学の山本・葭田ペアがフルセットに及ぶ激闘を繰り広げた。第1ゲーム、第2ゲームはいずれも両ペア譲らぬ攻防を見せ接戦となったが、ファイナルゲームでは渡邊・早野ペアが大きくリードを広げ、見事勝利を収めた。

（左）渡邊俐月選手　（右）早野滴選手

（広報委員　吉田翔一）

● 高等学校体育連盟バドミントン部 ●

令和7年度愛知県高等学校新人体育大会が、10月16日、17日、23日に名古屋市天白スポーツセンター他で開催された。9月に名北、尾張、名南・知多、三河の各地区予選が行われ、それらを勝ち上がってきた上位選手で競われる。初日の16日には2複3単の形式で行われる学校対抗戦が実施された。男子では名北地区の躍進が目立ち、上位4つのうち3つを占めた。総体で名電に敗れ、その雪辱を期した三河地区の岡崎城西が決勝に進み、名経大市邨に挑んだ。1複は個人戦でも優勝した渡邊・因藤(市邨)組と越前・戸田(城西)組の対戦であった。序盤から市邨が終始主導権を握ってラリーを作り、要所ではコースに強打を決めて2−0で取った。2複は山本櫂・江崎(市邨)組、角倉・小川(城西)組が対戦した。1ゲーム目インターバルまでは城西が5連続得点などでリードして折り返すが、インターバル後市邨がリズムを取り戻し、7連続で得点を重ね逆転する。そのあとはサーブ権を入れ替えながら最後まで進み、市邨がゲームを取り切った。その勢いで2ゲーム目も一気に決めて勝利を得た。1単は山本翔(市邨)と柴田(城西)が対戦する。山本が相手をよく動かし返球が甘くなるとしっかりコースに決め、危なげなくストレートで勝利し、チームの優勝を決めた。試合後キャプテン因藤は「優勝できたことはうれしい。残る課題を克服し全国選抜では優勝を目指したい」と強い決意を語った。

女子は準々決勝あたりから競り合った試合が非常に多く、男子が決勝の時にまだ準決勝にやっと入るという状況で最後まで試合がやりきれるかどうか心配になるほどであった。特に準決勝では男子と同じく前回2位の名電と城西の試合が最後までもつれる好試合であった。互いにエースダブルスを後ろに回した結果真っ向勝負となり、1複の山田・松永(名電)対二反田・古館(城西)、2複の中尾・冨田(名電)対縣・馬場(名電)ともに取って取られてを繰り返しながらファイナルゲームまで行き、結果どちらも城西が粘り勝ちとなったが、逆の結果となってもおかしくない非常に見ごたえのある試合であった。1単を早川(名電)が本田(城西)から取り1−2とすると、中尾・冨田と縣・馬場の試合が同時に始まった。立ち上がりでペースを作った縣・馬場が中尾・冨田から2−0で取ったところで勝負が決まった。熱戦を制して決勝に進んだ城西は市邨に挑む。1複は宮崎・山本樹(市邨)と古館・二反田(城西)1年生同士がぶつかり、個人戦でも優勝した市邨がストレートで取る。2複では門川・蟹江(市邨)と馬場・縣が対戦し、1ゲーム目は城西が準決勝の勢いで一気に攻めて取るが、2ゲーム目はリズムが崩れミスが続きあっさりと落とした。しかし3ゲーム目で気持ちを整えなおし攻めの姿勢を取り戻し21−12で取った。1単は熊谷(市邨)が取り、2単で宮崎と縣が、3単で田村と馬場の試合が同時に始まる。どちらも一方が流れをつかみ一気に行くかと思わせるともう一方が連続得点で追い上げるような展開を繰り返し、3単がファイナルゲームのインターバルまで進む間に、より長いラリーが多かった2単を宮崎が2−0で取り市邨の優勝が決まった。キャプテン門川は「熱い応援に感謝し、男子と同じく次の目標は全国優勝」と皆で勝ち取った優勝を喜んだ。(広報委員　大村悠介)

		優勝	準優勝	第3位	
男子	学校対抗	名経大市邨	岡崎城西	愛工大名電	名古屋
	複	渡邊・因藤(市邨)	山本翔・江崎(市邨)	西牟田・日々(市邨)	平井・山本櫂(市邨)
	単	渡邊(市邨)	山本櫂(市邨)	因藤(市邨)	江崎(市邨)
女子	学校対抗	名経大市邨	岡崎城西	愛工大名電	豊川
	複	宮崎・山本(市邨)	馬場・縣(城西)	中尾・冨田(名電)	門川・蟹江(市邨)
	単	馬場(市邨)	熊谷(市邨)	宮崎(城西)	田村(星城)

大府
JR 大府駅西口徒歩 8 分
はりーあっぷ
代表　中口直人
TEL(0562)44-5529　FAX(0562)44-5594

バドミントンプロショップ
リーダース グループ
SINCE1979

名古屋一社
地下鉄一社南出口より徒歩 2 分
(有)リーダース
代表取締役　菱田修光
TEL・FAX(052)703-2767

● 中小学校体育連盟バドミントン部 ●

9月6日、緑スポーツセンターにて愛知県中学生チャレンジバドミントン大会が行われた。県トップ8に次ぐ選手たちが上位を目指して戦った。

●男子決勝

小野 春陽（豊橋市立高師台中） **30 － 22** **井村 柊陽**（大里東Jr.）

力強いスマッシュとネット前への速い詰めを見せる井村選手。対して小野選手は「あげないようにした」と冷静に対応。ネット際に沈めるようなレシーブで連打を許さない守りをみせる。またロブを左右に散らすようにして、井村選手の得意な展開を封じていく。「年下には負けられない」という意地もあって、相手の攻めをしのぎながら、リードを保ち優勝を決める。

●女子決勝

牧田 みなみ（大府南中） **30 － 29** **神谷 紀杏**（T-Jump Jr.）

小柄ながらコートを走って、速いタッチを見せる牧田選手。一方、神谷選手はネットを切って、はねるように下がってスマッシュを打ち込む展開で、一進一退試合は進む。

ネット前の高い位置でのタッチによる牧田選手のロブとヘアピンは、神谷選手の体力を削って、徐々にリードを広げていく。神谷選手が相手を後ろへ下げるようにドリブンクリアを繰り出し対抗するが、弱点補強をしてきた牧田選手は飛びついてはじき、主導権を渡さない。

しかし、終盤、神谷選手はシャトルに食らいつくような気持ちのこもったレシーブで粘り、ついには29対29まで競り合う。息を飲む展開の最後は、牧田選手のショットがネットにあたり、決着がついた。

「ラリーが長く厳しい試合だった」と振り返る牧田選手。紙一重の差で勝敗が決まる好試合となった。

（広報委員　中村圭吾）

連絡投稿

〒485-0041　小牧市小牧2-212
広報委員長
松浦　孝至（まつうら　たかし）

公式サイトアドレス
https://www.badminton-aichi.com/
Eメールアドレス
info@badminton-aichi.com

西三河のバドミントン専門店

モリタスポーツ

豊田市山之手3丁目100番地
☎〈0565〉29－0055

審判連載 ルールブック講座

第16回 「プレーの中断」 池上 信之

競技規則第16条3項に『プレーヤーの責任でない状況によって必要とされるならば、主審は必要と思われる間、プレーを中断できる』となっています。プレーヤーの責任でない状況とは、

①ラケット、ウェア、靴などが破損した
②パートナーの振ったラケットでケガをした
③鼻血がでた（出血した）
④コンタクトレンズがはずれた
⑤ケガをして、医師などの診察を受けるとき
⑥大会運営規程第27条の停電、火災、地震が起きた時

と規程されています。このような状況になった場合、主審は右手をあげて、レフェリーを呼び、指示を仰ぎます。レフェリーの指示に従い主審は『プレーイズサスペンデッド』（プレーは中断されています）とコールします。プレーを中断した場合、そこまでのスコアはそのまま有効となり、プレーを再開するときは、その点数から始めます。ただし、その日に再開できない場合、後日行われるマッチは最初（ラブオール）からやり直すことになります。よくある『足がつった（痙攣した）』はプレーの中断理由にはなりません。『足がつった』ことは体力の消耗と見なします。もし、足がつって、なかなかプレーを行わない場合は『アーユーリタイアリング（棄権しますか）』とプレーヤーに尋ねてください。足がつってプレーを再開しない場合は遅延行為とみなされ、警告（イエローカード）の対象となりますので注意してください。

編集後記

あけましておめでとうございます。

新年早々、嬉しいニュースです。昨年末の全国小学生バドミントン選手権大会で女子団体と6年女子シングルスが見事全国優勝に輝きました。選手の皆さん、おめでとう!! 小学生連盟や所属団体、関係者の皆さんのご尽力に感謝いたします。

小学生が強いとその上の中学生、高校生にも波及して相乗効果も期待でき、将来がとても楽しみです。県勢の選手たちが、駿馬のごとく勢いに満ちた飛躍の年になりますように!!

さて、楽しみと言えば、9月にアジア・アジアパラ競技大会が一宮市の「いちい信金アリーナ」で開催されます。バドミントンの強豪国も多いので、そのプレーを実際に見て感じていただきたいです。皆さんもぜひ参戦?しましょう。（広報副委員長　鈴木勝男）